

文化審議会の答申と敬語教育

On the Guideline for Honorific Education in the Report of Japanese Language Council

郡 千寿子*

Chizuko KOHRI*

要 旨

2007年2月に文化庁文化審議会国語分科会が「敬語の指針」（答申）を発表した。その内容を手がかりにしながら、従来の敬語教育について再検討し、今後の敬語教育についての留意点や方向性について、考察検討を加えたものである。現時点での教育現場、特に教科書における敬語教育の内容を比較検討し、現状での課題を提示した。また、日本語学分野における敬語論をふまえて考察してみた結果、今後の敬語教育の方向性として、従来の絶対敬語としての敬語教育から、相対敬語、つまり他者への配慮としてのコミュニケーション重視の敬語教育への転換期にあることを論じた。

キーワード：尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語、敬語教育、国語審議会

1. はじめに

2007年2月、文化庁文化審議会の国語分科会が「敬語の指針」（答申）を発表した。その答申の内容については、是非を含めて、新聞紙上¹⁾でも様々に取り上げられ、社会における「敬語」への関心が高まったように思われる。実はこれに先立ち、2006年11月には、「敬語の指針」（報告案）が出されている。そして、この文化審議会国語分科会で審議された報告案の「敬語の指針」が一般に広く公表され、それに対しての意見を文化庁が募集するという経緯を経ているのである。

まず「報告案」が出され、それに関しての意見を募るという、従来には見られなかった全く新しい試みがなされたのが、今回の「敬語の指針」（答申）であった。そして、特に内容面での争点となったのがその分類である。敬語の種類は、従来、「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」という三分類²⁾であった。それが「尊敬語」「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」「丁寧語」「美化語」といった五分類に改めら

れ、その点に注目が集まったのである。

そうした現状を考えると、敬語の新分類だけでなく、敬語そのものへの考え方も含め、小学校、中学校、高等学校といった教育現場での今後の対応策が問題となってくるであろう。答申の内容がどう影響するのか、また教育現場でどのように対処していくべきなのかについて、様々に議論がなされるだろうことが予想される。

本稿では、文化審議会の「敬語の指針」³⁾を手がかりにしながら、日本語学という専門領域の立場から、敬語教育について言及し、教育現場で必要とされる対応について、検討と考察を加えてみたいと思う。「敬語の指針」（答申）が発表された後、早速に2007年5月、国語科教育の実践的な教育研究雑誌である『月刊国語教育』では、「「言葉遣い」の定着を図る授業」という敬語に関わる特集が組まれている。こうしたことを背景に、本稿では、従来の敬語教育を見直し、検討した上で、今後の留意点や方向性について考えてみたい。

* 弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

2. 敬語と国語審議会

文化庁文化審議会の国語分科会は、文部科学大臣の諮問機関である。元々は、「国語審議会」⁴⁾と呼ばれていた。国語審議会は、1934年に官制が交付された文部大臣の諮問機関として始まっている。1949年からは、文部省設置法という法律で設置が定められ、国語審議会令という政令で規定された組織となったが、2001年1月に廃止。それ以降は、新たに設置された、文化審議会の国語分科会として、文部科学大臣の諮問機関となった。

国語審議会が、政策上に果たしてきた役割は大きく、日常生活における日本語使用の基準や模範をある意味で決定してきたといえる面がある。たとえば、「常用漢字表」の規定、現行の「現代仮名遣い」の制定なども国語審議会の仕事であった。いうまでもなく、学校教育の教科書に及ぼしてきた影響も大きい。つまり、「国語政策」や「言語政策」といわれる一翼を担ってきたのが、国語審議会であったともいえよう。

ここでは、国語審議会における、「敬語」に関する審議について、従来までの言及に少しふれておくことにしたい。

国語審議会での敬語への言及は、1952年（昭和27）4月の「これからの敬語」（建議）に遡る。国語審議会の敬語部会が、1950年（昭和25）6月の第1回部会から、1952年（昭和27）2月の第18部会にかけて行った議論をまとめたものであり、国語審議会第14回総会での議決を経て文部大臣に建議されたものである。

1949～1962年は、諮問なしに各大臣に建議できた期間であったが、「これからの敬語」⁵⁾をまとめた敬語部会の部会長は、金田一京助氏であった。以下の「基本方針」についても金田一氏の敬語への考え方が色濃く反映されたものであったことは指摘できるであろう。結論から言えば、「敬語のこれから」のキーワードは、「平明」「簡素」である。建議「これからの敬語」の「基本方針」を引用してみよう。

- 1 これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

- 2 これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

- 3 女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている。（中略）この点、女性の反省・自覚によって、しだいに純化されることが望ましい。

- 4 奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や不当に低い謙遜語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格の尊厳を見失うことがあるのは、はなはだいましむべきことである。この点において国民一致の自覚が望ましい。

こうした基本方針からは、従来の複雑な敬語体系を批判的にとらえている点、また、民主主義の世相を反映させようとした、上下関係でない敬語の有り様を模索した様子が見て取れる。たとえば、1の「平明・簡素」という表現からは、わかりやすい敬語を目指したことがうかがえよう。2からは、敬語の目的が、絶対敬語（上下関係）から、相対敬語（相互尊重）へと転換すべきであることが明示されている。敬語の使用法をより単純化し、また身分的な意識を排除しようとした思想がうかがえるのである。

単純化という点からは、具体的には、たとえば「レル敬語」を支持したことが挙げられる。「お～になる」も掲げられているが、「レル敬語」について「将来性がある」と記し、「レル敬語」を勧めるような文言が見られるのである。「レル敬語」は、敬語体系全体の中で敬意度の低い存在であり、簡素化という面では有益に思える。しかし、そもそも日本語の敬語を歴史的に考えた場合、「レル敬語」は異端的な存在であり、また、他の敬語語彙が縮小されずに使用され続けたためもあって、結局、「レル敬語」の普及が実現しないまま、現在に至っている。

その後、1993年以降「言葉遣いの検討（敬語も含む）」がなされるのであるが、最初の審議から四十年も経過していることを考えれば、再検討されるのは当然であったともいえよう。その後も、2000年（平成12年12月）「現代社会における敬意表現」（答申）、2006年（平成18年11月）「敬語の

指針」(報告案)、そして2007年(平成19年2月)「敬語の指針」(答申)が、文化庁文化審議会・国語分科会から発表され、審議会が半世紀以上にわたって、敬語について検討を続けてきたという経緯は、大変重要な背景である。

当初は、平明と簡素化を図ることで、敬語に対する、難しいといった意識を和らげようとしたらしいことが「これからの敬語」(建議)の「基本方針」から見てとれた。つまり、わかりやすい敬語を定着させることで、敬語の使用をよりすすめて、敬語は簡素単純化する方向には定着しなかった。

上下関係という、ある意味でわかりやすい絶対性敬語から、相互尊重という相対性敬語への移行は、民主主義という世相からは、理想的にも思えた。しかし、尊重するという個人の意識に基づくという発想は、かえって敬語の使用を個人レベルの考え方にゆだねてしまう面もある。言葉遣いは、個人それぞれの使用意識だとする方向は、社会情勢の中で、敬語の使用を低迷させることとなり、敬語に対する規範意識も低下させ、結果的には、敬語の弱体化を招いたという見方ができるのではないだろうか。

政府の機関が、言葉遣いについて言及をすることは、当然のことながら、必要だと考えられているからである。半世紀にわたって、審議会が「敬語」について言及し続けてきたということは、敬語の使用について問題が存在し続けていた、ということをも物語っている。常に敬語については報告や答申を必要とした、ということであり、言語政策上の課題であり続けている、ということを示しているのである。

今回の「敬語の指針」の内容をめぐっても、様々に議論の対象となり、人々の関心を引いた。内容についての議論はもちろん重要であり、今後、社会や教育など多方面に影響を及ぼしてゆくに違いない。しかし、最も注目すべき点は、敬語には課題がある、ということ認識することである。そして、審議会が「敬語の指針」を示した最たる意義も、敬語への再考をうながした点にあるといえるのではないだろうか。

3. 学習指導要領と教科書における「敬語」

敬語に限らず、教育の内容は、当然普遍ではなく、常に新たな動きがあり、その対応策を考える必要性を迫られているといえる。新たに「敬語の指針」が発表されたことをきっかけに、国語教育の現場では、教科書の内容への対応や今後の敬語の教育方針など、多くの課題を抱えることになった。

「敬語の指針」では、最初に「よりどころのよりどころとして、敬語の基本的な考え方や具体的な使い方を示すもの。」と書かれている。つまり、この新しい指針の内容が、現時点での敬語の考え方の基盤であるとしているのである。「敬語についての教育」では、「人が社会生活において敬語を活用できるようになる過程では、学校教育や社会教育への学習と指導が重要な役割を果たす。」と記載され、今後は、この指針の内容に添った教育内容が検討される必要性に迫られることが容易に想像できよう。

ここでは、まず、現時点における敬語教育が、どのように扱われているか、またどのように教科書に記載されているかを検討しておきたい。『小学校学習指導要領解説』⁶⁾では、〔言語事項〕の〈言葉遣いに関する事項〉の中に記載が見られる。

〈3学年及び4学年〉

言葉に関する事項

(ア) 相手やその場の状況に応じて丁寧な言葉で話し、また文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。

とあるが、これは、「敬語」といった枠組みではなく、敬体と常体という「文体」という考え方の中で扱われているといえるであろう。

〈5学年及び6学年〉

言葉に関する事項

(ア) 日常よく使われる敬語の使い方に慣れること。
(イ) 共通語と方言の違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。

とあり、注目すべきは、敬語と共通語・方言が同じ事項で扱われていることである。敬語が、独立

した教育項目としてでなく、「言葉遣い」という枠組みの中で考えられており、また、共通語・方言といった、話し方と関連するものとして扱われている。

参考までに教科書の内容を紹介しておきたい。教育出版の教科書『小学国語 ひろがる言葉 6下』⁷⁾では「敬語」が次のように説明されている。

「敬語のはたらき」

「相手に敬意を表す言い方を敬語といいます。」

「敬語の種類」

尊敬語「話し相手や、話題になっている人物にかかわることを高めて言う言い方。」

けんじょう語「自分や身内にかかわることを低めて言う言い方。」

ていねい語「話し相手に対して、ていねいと言う言い方。」

とあるように敬語を「敬意の表明」とし、敬語の種類を「尊敬・謙譲・ていねい」の三分類とする。

では、中学校では、どうなっているのであろうか。教科書教材での敬語について少し検討してみたい。結論からいえば、敬語のとらえ方や敬語の種類が、各教科書によって相違していた。つまり、教育内容に統一性がないのである。

今回の「敬語の指針」は、「三分類」から「五分類」に改められたことが、ひとつの大きな変化であり、重大な変更のように受け止められていた。しかし、実際には、教科書教材での扱いは、三分類としているものばかりではなく、また、敬語の説明にも相違が認められたのである。

教科書出版社別に①敬語のとらえ方②敬語の種類について、簡単にまとめて提示しておく。

〈東京書籍〉

①話し相手や環愛の人物への敬意を示す言葉。

②尊敬語、謙譲語、丁寧語

〈三省堂〉

①改まった気持ちを表すときに使う言葉。

②尊敬語、謙譲語、丁寧語

〈教育出版〉

①人間関係に応じた言葉遣い。

②尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語

〈光村図書〉

①丁寧な言葉遣いなど改まった表現。

②尊敬語、謙譲語、丁寧語、美化語

〈学校図書〉

①気配りについての表現のひとつ。

②尊敬語、謙譲語、丁寧語

以上のように敬語のとらえ方については、「敬意」「改まり」「人間関係」「気配り」といったキーワードで考えることができよう。〈東京書籍〉は、従来の一般的な考え方である「敬意」で説明する。「敬意」を少し和らげた言葉「改まり」としているのは、〈三省堂〉〈光村図書〉である。これらは、基本的には、「話し手の気持ち」を表現するものとしてとらえているものである。しかし、たとえば〈三省堂〉では、「それぞれの言い方は、話し手の気持ちの改まりの違いが、ことば遣いの違いとなって表れたものです。気持ちの改まり方の違いには、話し相手や話題にする人の年齢や立場の違い、自分との親密度の違いなどが関係しています。また、話をする状況や場面の違い、話題にする内容の違いなどもかかわってくる場合があります。」という、説明が見られ、従来の上下関係といった枠組みだけでなく、話し手の気持ちの背景に存在する要素についても踏み込んだ記述がなされている。

〈教育出版〉では「人間関係」という用語で敬語をとらえているが、これも従来の「敬意」とは別の側面に目を向けたものである。

〈学校図書〉では「気配り」が使われているが、これは、「敬語の指針」でキーワード的に使われている「配慮」という用語と同列の考え方といえるであろう。また、〈学校図書〉では、「年齢、社会的立場、関係の親密さなどの、さまざまな人間関係に気を配って、言葉を使い分けることがある。敬語はこうした気配りについての表現の一つ」とあり、「気配り」の具体的な内容も提示されていた。

従来の「敬い」といった話し手の気持ちという要素は、敬語にはもちろんあるが、それ以外の社会的立場や人間関係性にも着目した考え方が次第に導入されるようになっていくことが確認できると思われる。

敬語の種類についても、尊敬語、謙譲語、丁寧語と三分類にしているのが〈東京書籍〉〈三省堂〉〈学校図書〉である。美化語を新しく立て、四分類にしているのが〈教育出版〉〈光村図書〉で

あった。

「敬語の指針」によれば、敬語の重要性として、「①相手や周囲の人と自分との関係を表現するものであり、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きをもつ。」「②相手や周囲の人、その場の状況について、言葉を用いる人の気持ち（「敬い」「へりくだり」「改まった気持ち」など）を表現する言語表現として、重要な役割を果たす。」とある。従来の認識であった「敬い」が②に見られるが、最初の①では、「人間関係」が使われており、どちらを上位概念とするかが、見解の分かれるところであるといえよう。教科書教材の相違もそうした考え方と関係するのかもしれない。

しかし、今後は、「敬いの気持ち」も重要であるが、次第に「社会の中での関係性」といった観点へと敬語のとらえ方が移行していくことが予想される。また分類についても、謙譲語を二つに分ける五分類とした「敬語の指針」が受け入れられる前段階として、少なくとも三分類から四分類への移行は、早急にすすむものと考えられるであろう。

4. 日本の敬語論

そもそも、「敬語とは何か？」ということが、日本語学分野での敬語論ではひとつの大きな課題であった。滝浦真人氏の研究⁸⁾によれば、日本語の敬語論の流れは、大きく二つの考え方、「敬意」と「関係認識」に集約できるという。

まず、国学の流れに属する人たちによってとなえられ、現在でもなお、影響力を持ち続けていると思われる、「敬語は敬意の表現である」といった山田孝雄氏らの敬語論である。それは、戦後の代表的言語観形成を担った、金田一京助氏へと受け継がれていった。敬語の本質は、発話主体の心の表現として敬意に求められる、とする考え方であり、これは長く、意識的また無意識にも多くの人々に支持されてきた思想である。

たとえば、今日もなお、美化語という分類や存在を認めない立場は、こうした考え方が根底にあるものと推測できる。「お米」の「お」は、話し手の品位を装う語ではなく、「米」に対する敬う心を表したものと考え、美化語でなく尊敬語だ、と主張する立場にある人々は、こうした「敬意」

に重きをおいた敬語論に基づいているのであろう。

敬語をどのように分類するか、ということが本来の敬語における課題なのではない。実は、敬語をどのように考えるか、敬語とは何か、ということが根本的な問題なのだと思う。

山田氏や金田一氏に代表される、上下関係を基本とした絶対敬語に対して、敬語を「人間関係についての認識の表現である」とした、時枝誠記氏に代表される立場が対立する。これは、早くは、ロドリゲス、チェンバレンによって指摘されていた考え方であったが、後の三上章氏もこの系譜上にある。つまり、敬語は相対的なもので、人間関係の中で変動するものと考えられたのである。相対敬語においては、話し手、聞き手、言及される人物という三者間の人間関係の中で敬語が変動し、とりわけ聞き手が鍵を握るという。

山田氏らの「敬意」と時枝氏らの「関係認識」の対立は、主体の敬意とシステムとしての敬語との対立と見ることもできるものであった。

近年は、敬語研究の新たな考え方として、社会言語学的視点や語用論からの再検討⁹⁾がすすんでいる。言語人類学者のP・ブラウン氏と語用論学者のS・レヴィンソン氏の共著『ポライトネス—言語慣習における対人配慮の普遍性』に基づく、「敬語は距離の表現である」という考え方の導入である。つまり、敬語というシステムが直接表示するのは、「距離」であり、対象人物との関係が「視点」を介してソト的（疎遠）かうチ的（親密）であるかの対立である、とする。敬語において表現される敬意とは、話し手が距離を置き、相手の領域を侵さないことによって間接的に示される、結果ないし効果としての含みであると考えられるものである。

従来は、一般に「敬語」という用語で表現されていた研究領域も、こうした近年の敬語論の影響によって、「待遇表現」¹⁰⁾という用語が使われることもある。身分や階級が固定していた時代とは違い、現代社会では、人と人の関係性によって、つまり、上下や親疎や立場によって、言葉遣いが相違する場合が多い。社会の状況変化や研究動向に影響を受けながら、敬語への考え方やとらえ方にも修正がなされてきたのである。

「敬語の指針」においても、本来は全く別の領域で取り扱われるはずの「方言」についての言及がある。「留意すべき事項」として「方言の中の

敬語の多様性」が挙げられているのだが、これも、敬語を待遇表現だとして考えれば、不自然ではない。敬語も方言も、対人との関係性、つまり親疎や距離感によって、使用が規定されるものである。待遇表現の一環として、敬語や方言を包括的にとらえた考え方といえるであろう。

5. まとめにかえて

敬語の使用が低迷し、誤用が氾濫する実情にあつて、敬語について再考し、敬語教育についても見直すきっかけとして、文化審議会の答申「敬語の指針」は、有効に活用されるべきである。

日本語の敬語論もそして言葉の有り様も変化を続けてきた。敬語の種類については、今後、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三分類から、尊敬語・謙譲語・丁寧語・美化語の四分類が主流になっていくと考えられる。謙譲語をⅠとⅡに分ける五分類の考え方の定着には、今少し時間が必要かもしれない。

しかし、本来の重要課題は、敬語をどうとらえるか、ということである。教科書によっても、敬語の定義や種類は一貫していなかったが、分類は、敬語をどう位置づけるか、ということとも密接に関係している。敬語をどう分類するか、という問題は、研究者によっても未だ見解の相違がある。ただ、教育現場での無用の混乱を避ける意味において、今後は「敬語の指針」にできるだけ沿って調整されることが望ましい方向であると思われる。

従来、多くの人が漠然と「敬意の表現」としてとらえている絶対敬語観は、現在の研究動向から考えると、調整されるべき時期にきているといえるだろう。敬いの気持ちを表明するといった立場だけではなく、対人との関係性や距離感、周囲への配慮を表現するものとして、敬語が位置づけられ、社会的で相対的なものという敬語観が次第に定着していくように思われる。

敬語だけでなく、社会実情や言葉の変化はとめることはできない。誤用が慣用となっていく現象は、歴史的にも自然な流れであるといえるが、寛容に容認することと、放置することは別である。言語の問題については、常に意識的に、調整や修正の努力をしなければならないであろう。教育現場には、その責務が課せられている。敬語教育も、新しい敬語の考え方に基づいて、展開してゆく時

期にあるといえるのではないだろうか。

注

- 1) 平成18年12月1日の『朝日新聞』では、井上史雄氏(明海大教授)が「敬語五分類は混乱の元 謙譲語の変化は途中段階」と題して文化審議会の「敬語の指針」(報告案)に対して異議を表明している。また、翌日12月2日の『朝日新聞』にも、荻野貞樹(元産能大教授)が「敬語指針「美化語」新設に疑義あり」と題する意見が掲載された。「報告案」以降、「答申」が発表されてからも、新聞では特集記事が多数掲載されるなど、審議会の「敬語の指針」が注目されていたことがうかがえる。
- 2) 「敬語の指針」では「従来三分類」としており、便宜上、本稿でもその分類を一般論として扱った。しかし、四分類をとる立場のものも多い。辻村敏樹『現代の敬語』(共文社、1967年)、「日本語の敬語の構造と特色」(『岩波講座日本語4 敬語』岩波書店、1977年)等参照。
筆者は、日本語を歴史的な観点から考える立場上、美化語は、女房言葉を起源とするという、その発祥に着目して、尊敬語でなく、丁寧語の中のひとつとして分類し、四分類が適切であると考えている。
- 3) 敬語小委員会のメンバーに敬語研究者の菊池康人氏がおられ、菊池氏の敬語論が「敬語の指針」の内容に影響を与えていることが推測できる。菊池康人氏『敬語』(講談社学術文庫、1997年)参照。
- 4) 国語審議会については、文化庁『国語施策百年史』(ぎょうせい、2006年)、安田敏朗『国語審議会 迷走の60年』(講談社現代新書、2007年)等参照。
- 5) 「これからの敬語」については、滝浦真人氏が「金田一自身、相対性敬語を装いつつも、結局は絶対性敬語へと回帰したのではないだろうか。」(『日本の敬語論』大修館書店、2005年)とした見解を示しておられる。本稿は、金田一京助氏の敬語論について考察することが目的ではないため、詳細には述べないが、当時の敬語への考え方の基本としては、絶対敬語から相対敬語へと移行すべきだという方向性はもちつつも、現実にはまだ絶対敬語論が根付いたままであったと考えている。
- 6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説』(東洋館出版社、1999年)90頁、123頁参照。使用教科書は、「伝え合う言葉3」(教育出版、2002年)、「新しい国語3」(東京出版、2002年)、「新しい

- 国語 3」(光村図書、2002年)、「現代の国語 3」(三省堂、2002年)、「中学校国語 3」(学校図書、2002年)。
- 7) 木下順二・今西祐行他著「ひろがる言葉 6 下」(教育出版、2004年) 28～32頁参照。
- 8) 滝浦真人『日本の敬語論』(大修館書店、2005年) 参照。
- 9) 『月刊言語26巻6号』〈特集 ポライトネスの言語学〉(大修館書店、1997年6月)、『月刊言語30巻12号』〈特集 敬意はどこからくるか ポライトネスと敬意表現〉(大修館書店、2001年12月) 等参照。
- 10) 沖森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾著『図解日本語』(三省堂、2006年、124～131頁) では、「第6章 現代生活と日本語」のなかに「第1節 待遇表現」の項目が設定され、「敬語」は「待遇表現」のなかに含まれた扱われ方となっている。
- (2008. 1. 16受理)